

ケータイへの異論

第一生命経済研究所 常務取締役
村場 悦郎

数年前、小さな工場を経営している友人の運転で旅行した。友人が県外を運転しながら注文のお客と携帯電話で値段や納期などを決めていたのを、助手席で見聞きしたことがあった。これがあれば留守番の事務員も要らないし、休日にも仕事ができるのか、と感心した次第であった。しかし、その後携帯電話をかけながらの運転を見るのが多くなり、ひどい時は対向車が携帯電話を片手に蛇行に近い運転をしているのを見て、これは危険だとあまり感心していない。

携帯電話は今や世の中にあふれている。いつの頃からか「ケータイ」という表記になっているようだが、機能が多様化し、料金競争も激しいようだ。とにかく便利なものらしい。らしいというのは、自分で持ったことがないし、その便利さを実感したことがないからである。便利さを否定するものではないし、どうしても持たざるを得ない人もいだろう。いずれは最小限の連絡ツールとして使うことになるだろうと思っているが、現在のところは使うつもりはない。便利なことは恐らくそうであろうということ承知の上で、あえて携帯電話を使うことそのものへの異論を述べたい。

見ていると、持っている人はすぐかけるし、聞こえてくる感じからすればたいしたことでもないのにすぐかけている、と思われる。たとえば、何かが分からなくなった判断できなかつたりすると、すぐ誰かにかけて判断や指示を仰いでいるのではないか。それは一刻を争う時にはぜひそうしてリスクを回避すべきだろうが、そうでなければ、自分でちょっとは考えなさいよと言いたい。ほんとにこらえ性がなくなっているし、他人に依存している。

今では小学生まで使っているようだが、この視点、即ち他人依存という観点から見れば、携帯電話は子供たちの思考力や判断力を向上させないで、親や友達に依存する人間を作っているのではないかと危惧する。携帯電話によって通常のコミュニケーションが少なくなっているわけではないとは言われているが、それより“自分で考え

ない”、“自分が未知のことへ思いを馳せることを訓練できない”ことの方が大きな問題だ。

携帯電話で危惧するもうひとつは犯罪に使われるということだ。最近の犯罪には必ずと言っていいほど携帯電話が使われているし、プリペイド式での犯罪も世間を騒がせた。この夏大きく世間の耳目を集めた女児4人監禁事件でもそうだ。信じられないことだが、親は携帯電話で連絡が取れているから何日も家に帰らないでいても家出とは思っていないと、のたまうそうだから呆れる。また、そもそも顔を見たこともなく声を聞いたこともない人と出会い系サイトでメールを交換して(決してコミュニケーションとは言えないだろう)気味が悪くないのか、あまりにも無防備ではないか、そういう判断ができないことはそもそも「ケータイ病」というべきではないか。

また最近呆れた話は、このごろはカメラ付きが主流だそうだが、それに関連する犯罪が多く、盗撮で逮捕された報道をよく見かけるし、驚いたのは書店に必要な箇所をこっそり写すと言うではないか。本屋は本離れ、万引きと散々なのにまた新たな対策を講じなければならなくなった。駅やバス停で掲示された時刻板を写すのと違って、書店で本の商品価値そのものを写すのはまさに犯罪ではなからうか。

携帯電話はまさに携帯することでその役割を発揮するのであろうから、常時身につけていることによってさまざまな使い方の誘惑が生じるのであろう。メーカーはどこまでも機能を拡充して商品価値を高めようとするのだろうが、使う人間はよっぽど心してかからないと「便利さ」を得る一方で、「誘惑」に負けて大きな何かを失うかもしれない、と危惧する。

使わない自分の心理を探ると、要はそんなに便利な生活をしなくてもいいという価値観があるのだ。携帯電話は恐らく一面ではすごく便利で経済効果も生んでいるのだろうが、一方では人間にとつてもない束縛と不自由さをもたらしているのではないか。人の価値観にもよるわけだが、筆者は今のところ仕事や生活上持つことに必要性を感じず、逆に弊害を感じているのである。

「ゆたかさの過剰も善意の過剰もまた、生きものを殺しうる」(長田弘)

さて、ケータイ族はコミュニケーションの過剰によって殺される(何かを失う)ことはないのであろうか。